

大地

16号
1986. 10. 15
真宗大谷派
浄国寺 (23) 5724

おばあちゃんのこと

六年 蟹 江 葉 子

私が、おばあちゃんのことについて思い出すことは、小さいころからよくおばあちゃんの部屋に遊びに行っていたことです。

私が遊びに行くと、アメ玉をくれたり、10円や100円をくれたりしました。

また、私はおばあちゃんと背くらべをしたこともありました。気がつくとおばあちゃんを追いこしそうなくらい背が高くなっていくときもありました。でも、あと少し、もう少しと思うだけでなかなか追いつけません。私は、そんな背くらべを遊びの一つと考えていました。

おばあちゃんは毎日、朝夕、かさずおまいりをしていました。

しばらくして、といっても95才になっただけですが、ねたきりになりました。それでもおばあちゃんには、ふとんの中でおまいりをしました。

小さいころですが、私も時々おまいりをしました。じゅうずを借りておばあちゃんの横で「なむあみだぶつ」とぼそぼそ言っているとおばあちゃんがおきょうをとなえます。私は意味が分かりませんが、うをすらすら言えるので、いつも感心していました。

私はおばあちゃんがうらやましく思えました。それは、たくさんの人々に見守られて、何もこわがらず、静かにねむるように死ぬことができたからです。

私は、おばあちゃんを失ないました。心の中ではいつもおばあちゃんが生きています。

私はいつまでもおばあちゃんのことを忘れません。そして毎日おまいりをしておばあちゃんと話をしたいです。



おわり

俳句 六句

鎌倉にて
山崎 睦

◎懐石の 吸物に浮く

露の臺

◎大破せし 事故車にそそぐ

春の雨

◎紫陽花の まだ色なさぬ

東慶寺

◎一山の 翠を庭に

蕎麦の店

◎新緑に 顔そびえ立つ

露産仏

◎夕風の そよ風に乘る

ヨットかな

巢立ち

上越市幸町

川崎

美喜子

今春私共の娘が、親元を離れて一人で生活することに決まりました。二月末に入学する大学が決まり、三月早々に宿搜しと、目まぐるしく、又忙しく日が過ぎていききました。そんな時は宿を捜す事が先決で、早く落着く先を考えるばかりで、娘も一人で生活する不安や心配などする余裕はなかったようです。

学校から紹介して頂いた大家さんへ伺い、丁度四畳半一間だけ空いていました。お風呂もないし、少々薄汚れた部屋なので娘は不満の様でした。マンションや学生会館などは夢の夢と思っっているのです。そう贅沢な事は望んではいないのでしようが、学校へ歩いて七、八分程度と立地条件も考えて、そこにお願ひする事にしました。最低限必要な電気製品や調度品を揃え、布団を真新しくした為か、お嫁にやる様な気持ちになつてしまいました。こんな出来事が本当に何年か先にはやってくるのでし

うね。

四月の入学式からいよいよ一人立ちです。一人で生活してみるといろいろ困った事柄も出て来ます。その度に自分自身で処理しなくてはならない事も沢山あると思ひます。そうしながら一歩一歩大人になつていくのだと思ひます。親は遠くにはなれていてはアドバイスする程度です。

娘に聞いてみました。「あなた一人て寂しくない? : : 」と。「お友達も沢山出来たから寂しくはないけど、食事の時一人で食べているととても寂しくなる」のだそうです。家にいた時は食事が用意されていて食べる事が当り前と思つていた事が、自分で手を動かさなければ口に入らないとは、お母さんを尊敬する、などとお世辞を言つてくれましたが、娘にはよい勉強になつてゐる様です。

時々電話の向こうから「煮物はどうやってするの」「アスパラはゆでたら水に浸してもいいの」とかと : : それから料理講座が始まります。お蔭で電話代のかさむ事が悩みとなりました。この年頃ともなり、よい話相手になつていてくれたものですから、予期して

たとは言え、ふっといなくなつてしまつてから一ヶ月程変な気持ちになり、力が抜けた気分にもおちいりました。が、私共も早く子離れをして、子供は巣立つものと胸の奥底に納得させた次第です。

「報恩講」のお知らせ

◎とき 十一月一日十時半

◎法話 堀前恵成師

十一月二十八日は宗祖親鸞聖人の御正忌であります。この日を前後して、本山東本願寺をはじめ、全国の寺院、在家それぞれで「報恩講」がお勤めされます。

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨をくだきても謝すべし

浄国寺でも十一月一日(土)に勤修いたしますのでぜひお参り下さいませよう御案内申し上げます。



高田の人々

山崎 慎子

高田の住人になって十五年近い月日が過ぎた。もうじき生れ故郷での生活とそう変らない長さを、高田の四季と共にたかだびととして暮すことになる。いつもはただ毎日の暮しに押し流されて、沁々思うこともないのだが、考えてみれば実に様々な出来事があったと思われてくる。

そうした様々な出来事の裏にはいつも誰彼がいて、そういう多くの人々との出会いやふれ合いが、十五年の時間を充実してくれたのだ。

もう何年前になるだろう。遊びに来ていた里の両親が繰返し感心し口にしたのは「高田のタクシートの運転手さんの親切なこと」であった。両親はもともと、北国の人間にありがちな口の重さに加えて、人をほめたりすることの表現が（内心どんなに思っているか）苦手な人達である。だからこの時の感

心の仕方には、却って真実味がこもっているように思われた。

直江津駅に降り立ち、高田に向うべくタクシに乗場に向った両親の前に止まったタクシから、運転手さんがさっと降りて来てドアを開けてくれたこと。一種、戸惑いを覚えながら車に乗り込んだ両親に、運転手さんは軽く一礼をしてドアを閉めてくれたこと。車中の応待も自然で、飾り気のない高田ことばで話しかけてくれたり態度そのものに温もりがあり、ゆったりとした気分で道中を過したという。

やがて、目的地であるわが家に辿り着くと、いち早く運転席から降りてドアを開け、そして帽子をとってお礼を言われたという。両親には、この最後の、帽子をとっての礼が殊の外嬉しく、また印象的であったらしい。

私も又、そのタクシを時折利用しているが、その度運転手さんの爽やかな応待に、単純かつ素直な私は、たちまち嬉しくなってしまう。あるいはすっかり恐縮さえしてしまふ。

高田に住んで十五年。豪雪の度

に、私の選択はもしかしたら、大変な間違いではなかったか、と思わぬでもないではないが（？）春の桜や、初夏の妙高、ま夏の蓮たちが、あるいは縁を得た多くの人々との結びつきが、それ以上の力で私をひきとめてくれた、というのもまた実感である。

だからといって殊更に劇的な、あるいは感動的な出会いやふれ合いに恵まれていた、という訳ではない。むしろ、ごく些細な暮しの中で感じて来たことである。

たかだびとと称されるこの土地の人々の人情の細やかさや穏やかさは、住んで間もなく実感したことだったし、その印象は今でも変わってはいない。勿論、ヨソ者らしい不満や希望も無くはないし、満点と言ってしまうにはほめすぎでもあり、それぞらしくさえあるだろう。しかし、それはそれとして、わが高田の誇れる最高のものは、自然の佇みや昔日の偉人ではなく、むしろ、いつでも爽やかに接してくれるタクシの運転手さんのような人達ではないだろうか。そういう姿に、私はたかだびと、の良さを凝縮された典型を見る思いを常々抱いている。

「葬式」

山崎 隆 昌

祖父（前々住職隆英）の死は、僕がまだ六才の時であった。祖父についての記憶は、寝姿をわずかに想い出す程度でほとんど残っていない。ところが、不思議なことに、祖父の葬式については、断片的ではあるがかなり鮮明に覚えている。例えば、本堂での式場の様子、僕自身のその時の服装、叔父とともにした焼香のこと等、やはり子ども心にも余程何か異様なものとして感じられたのだろう。祖父の死から三十六年になる。もう間も無く四十二才である。僕が子どもであった頃に同じ四十二才であった大人達の姿を思い出し改めて自分自身の年令に驚かされることも、いささかの自己嫌悪をとまなうやりきれなさに、いらいだちを覚えるのである。

昭和四十九年十月、父が癌で声を失なって以来たくさん葬式に出させていた。その父も亡くなつて五年を経過する。同じ葬式でも、その家、あるいは土地柄などで随分違う。もっとも最近では、葬儀屋が手取り足取り全てをするようになってからは、何処でも同じ様になりつつあるのではあるが……

僕を知る範囲で心に残る葬式は東頸城大島村中野の葬式である。三年前、まだ若いお母さんが亡くなられた時もそうであった。仏間の真中に棺が安置され、棺には、寺より借りた七條袈裟がかけられる。棺の前には一対の蠟燭焼香台が置かれるのみである。棺の前に僧侶が座し、棺を参列者が取り囲む。そこには、けばけばしい祭壇もなければ、しらすらしくそしておかにももつともらしい葬儀屋の焼香順を読み上げる声もない。静かに、悲しく葬儀は進められる。

葬式仏教といわれて久しい。葬式というものは、亡くなったその人にならなく、その人に縁のあった残された人々にとつて重要な意味を持つのである。良い意味でも悪い意味でも。

覚如上人撰の「改邪鈔」には「本師聖人（親らん聖人）の仰せに曰く、『親らん閉眼せば賀茂河にいて魚に与ふべし』と云々」

と述べられている。ここに宗祖親鸞聖人の「死体」あるいは「葬式」に対する姿勢が明示されている。「改邪鈔」ではさらに「是れ即ち肉身を軽んじて、仏法の信心を本とすべき由をあらわします故なり、これをもて思ふに、いよいよ喪葬を一大事とすべきにあらざる、もとも停止すべし」と述べられているのである。

とりわけ「肉身を軽んじて、仏法の信心を本とすべき」の言は厳しい。

父が亡くなったのは、昭和五十六年である。五月二十六日、境内に溢れる参列者の中で葬儀が行なわれた。父のこの葬式は、父の為ではなく残された僕らの為に行なわれたのである。父の葬儀に会いながら、三十年前の祖父の葬儀の記憶がしきりに想い出されていった。

△あとがき△

今号「大地」16号をお届けします。今号の「蟹江さんから」川崎さんから「巣立ちの日」の稿をいただきました。いざいざの状況が、大変わる中、お感心なご愛顧の程を。向寒の折皆様に